
ペンギン男の撤退

宮柳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ペンギン男の撤退

【Nコード】

N0443M

【作者名】

宮柳

【あらすじ】

ある夜、僕の部屋にペンギン男がやってきた。

この奇妙な男はいったい何者なのだろう。

ペンギン男の侵入から撤退するまでの記録。

（前編）

安っぽいマンションのオートロックなど、不動産会社がマンションの格を少しでも上げようとして取り付けているだけであり、実際のところたいして役に立ちはしない。特に、僕のように注意力の足りない住人がいれば、たったそれだけで、マンションのオートロックは完全に意味を失う。ようするに、泥棒やストーカーといった本来オートロックによって排除せられるべき人物も、僕の後について歩くだけで、いとも容易くマンションに侵入できるということだ。

あの夜にしても、ペンギン男がマンションに侵入したことで、僕以外の人物が被害を受ける危険もあったわけだ。その場合、悪意がなかったとはいえペンギン男の侵入を助けた僕は、彼の共犯者ということになるのだろうか。ともかく、僕以外の住人がペンギン男の侵入に気づかずに済んだのは、不幸中の幸いといえる。

その夜のことを話そう。

そのぺたぺたという独特な足音に気付いたのは、僕が自分の玄関のドアの鍵を開けて中に入ろうとしたときのことだった。エントランスから自分の部屋の前までの50メートルほど、その足音に気づかなかった点については、「鈍い」と叱責を受けて当然のことだと思われる。

ぺたぺた。

ようやくその足音に気づいた僕は、ぎょっとして、ノートパソコンの入っている重たい鞆を、足の甲の上に落としてしまったほどだった。大げさと思われるかもしれないが、それくらい、その足音には

不自然な響きがあったのだ。サンダルの足音に似ているようで、まったく違う。まるでコンクリートの地面に吸着してしまいそうな感じなのである。

僕の足の上に着陸した黒い靴は、ぱたりと玄関の床に倒れた。ごくささやかな音だったので、おそらくパソコンは無事だろう。型の古いパソコンとはいえ、僕にとっては重要な仕事道具なのだ。一方、僕の足の甲は無事とは言いにくかった。痛み能耐えかねた僕は、玄関前の地面に座り込んだ。革靴の上から、そつと触れてみる。じんと痛む。甲の骨に、ひびが入ったかもしれない。

ちなみに僕は、以前にも足の甲の骨にひびを入れたことがある。本棚から広辞苑を抜こうとして、手を滑らせたのだ。ちょうど角の部分が甲にあたり、激痛が走ったことを覚えている。以来僕は、広辞苑を本棚の一番下の列に置くようにしている。この対策により、僕が広辞苑を足の上に落とす危険はほぼなくなったといえる。

さて、広辞苑の痛みと比べれば、靴の痛みは半分、いや三分の二とあったところか。ということは、甲にひびの入っている確率も三分の二と考えて良いかもしれない。そんな単純に計算できることではないだろうけれども。

ぺたぺた。

「だいじょうぶですか。」

奇妙な足音に続いて、低い男性の声が聞こえた。聞いたことのない声だ。知らない人物だと断言できる。そもそも僕には、ぺたぺたと音を立てて歩く知人はいないのだ。

「はい、ええ、もしかしたら。」

もごもごと呟きながら、僕はゆっくり振り返った。コンクリートの上に、黄色いひれのついた足が2本立っている。おそろおそろ視線を上へと持っていくと、そこにいたのは潜水夫の格好をした男だった。彼の着ている黒い潜水服は、のっぺりぬらりと、まるで水に濡れているような光りかたをしている。もとの材質がそうなのか、本当に濡れているのか、薄暗い蛍光灯の下では判別しかねた。

「もしかすると、怪我をなすっているかもしれないということですね。それはいけません。」

男は、至極真面目な表情で、そう言った。

「とりあえず、廊下にいるのもなんですから、部屋に入りませんか？ ああ、その鞆は私が持ちましょう。無理をなさらないください。」

「

男の言葉を聞いて、僕は一瞬、自分が他人の部屋の前に座り込んでいるような錯覚に陥った。なぜなら彼は、まるで彼の自室に入ることを促す調子だったからである。もちろん、この部屋は僕の部屋だし、言われなくとも僕はこの部屋に帰るつもりだった。しかし、親切そうな彼の物言いに反論するのも憚られ、僕は結局何も言わなかった。そういうわけで僕とその奇妙な男は、「とりあえず」僕の部屋に入ったのだった。

「こんな時刻まで残業でしたか。お疲れ様でございます。」

男は僕の鞆を持って、僕の部屋に入っていくた。足には黄色いひれをつけたままだ。それから彼は、僕のために、靴箱の脇に置いてあ

る来客用スリッパを並べてくれた。

「どうも。」僕はそう言つて、素直に来客用スリッパを履いた。普段は室内でスリッパを履くことはないのだけれども、僕はこういった些細な習慣の違いは気にしないことにしている。

「テレビ、つけますか？」男は親切な声で、僕に尋ねた。

「いえ、結構です。」僕は反射的に応えた。基本的に、朝と寝る前のニュース以外は観ないのだ。

「そうですか。」男は残念そうに言うと、チラリと時計を見た。つられて僕も時計を確認した。あと数十秒で11時になるところだ。男は、何か見たい番組があつたのかもしれない。

「もちろん、テレビをつけてもかまいませんが。」僕が注意深く提案をすると、男は目を輝かせ、すばやくリモコンに手を伸ばしてテレビの電源を入れた。

男が観始めたのは、僕なら絶対に観ないようなバラエティ番組だった。僕は、オーディエンスやスタッフの笑い声に対して、嫌悪感を覚える質なのだ。しかし、男は熱心に画面を見つめている。半開きの口元から、ときおり笑い声が飛び出しそうになるのがわかった。

僕はそんな彼の様子をじつと眺めていたが、しばらくして、この状況に違和感を抱くようになった。この男は誰だろう。なぜ、僕の部屋でテレビを観ているのだろう。

僕は男の、紺色の潜水服（ダイビングスーツというのだろうか？）と、足元の黄色いヒレ（ファンというのかもしれない。）を交互に

観察し、それから、リモコンを握ったままの彼の手を観察した。潜水服に包まれた彼の手には、指というものがなかった。トドやアザラシの手のように、ひらべったい形状をしている。ただし潜水服の下には、ごく一般的な5本指が隠されているようだ。リモコンを持つ手の周囲には、不自然な皺が寄っている。その手で、よくチャネルを換えられたものだと感じするほどだ。

とにかく、男の様相は不自然極まりないものだった。今の今まで、この状況を許していたことが不思議でならない。ここ数日間の残業疲れで、少々頭が鈍くなっていたに違いない。

「あの。」僕が声をかけると、男ははっとしてテレビから目を離れた。

「はい。いかなさいましたか？」男の顔は僕のほうを向いていたものの、目はちらちらとテレビ画面を追っていた。

「失礼ですが、どちら様でしょうか？」僕はできるだけ礼儀正しく尋ねた。

男は当惑したように目をぱちぱちとさせて、それから微笑んだ。（とても紳士的な笑顔だった。）

「名乗るほどのものではございません。ただのペンギン男でございます。」

彼の表情があまりに誠意に満ちていたので、僕は危うく「ああ、そうでしたか」と納得してしまうところだった。だが、すぐに彼の言葉に納得するのはおかしいと気づき、「なるほど。」と応えるに留めたのだった。

僕は、いったい何と尋ねればいいのだろうか、考え込んでしまった。すると彼（自称・ペンギン男）は、僕が納得したと思ったらしく、テレビ画面に向き直ってしまった。

そんな彼の様子を見ると、礼儀正しく質問して彼の素性を調べる必要などない気がしてくるのだった。有無を言わず部屋の外に追い出してしまったほうが、手っ取り早くていいのではないだろうか。

とりあえず、彼の熱中しているテレビ番組が終わるのを待つことにした。僕は意外と優しいのだ。決して、気が弱いのではない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0443m/>

ペンギン男の撤退

2011年1月28日15時16分発行